

資料

映画で学ぶ第1次世界大戦（関連サイト付）

軽部 恵子

キーワード：第1次世界大戦，映画，歴史，URL，視聴覚教材

第1次世界大戦は英語でWorld War Iという。と、中学校・高等学校の英語の時間に習った日本人は多いだろう。だが、The Great Warとよぶことも多い。それは、当事国の数，戦死者数，使用された火薬の量など，あらゆる意味でそれまでの戦争と規模が違ったからである。The Great Warは戦争の定義を塗り替えたともいえる。

The Great Warが欧米の歴史に持つ重さは，休戦記念日をみてもわかる。1918年11月11日，ドイツが休戦協定に署名して実質的に大戦が終結した。現在，11月11日の休戦記念日（Armistice Day）は，アメリカではVeterans Day（Veteransの末尾にアポストロフィーは付かない。<http://www1.va.gov/opa/vet-day/>を参照），イギリスとカナダ，オーストラリアではRemembrance Dayとよばれる。イギリスでは，毎年10月頃から議員，テレビのニュース・キャスターなどが赤いひなげしの造花を胸に付け，戦没者に哀悼の意を表す。11月第2日曜日（Remembrance Sunday）の式典には，エリザベス2世が出席し，停戦が実現した午前11時に2分間の黙祷を行う。フランス・パリのエトワール凱旋門には，無名戦士の埋葬を記した碑が置かれている。2009年の式典には，アンゲラ・メルケル現ドイツ首相がドイツ首相として初めて出席したことがニュースになった（AFP「各地で第1次世界大戦休戦記念式典，独首相が初めてパリの式典に出席」（2009年11月12日 08:38） 発信地パリ

/フランス, <http://www.afpbb.com/article/politics/2662629/4884877>, 2010年8月31日アクセス)。

第1次世界大戦では近代兵器が発明され、飛躍的に発展し、そして大量に投入された。例として、機関銃、毒ガス、戦車、潜水艦、飛行機が挙げられる。とくに飛行機は発達のスピードが早く、1903年にライト兄弟が初飛行に成功してから、わずか10余年で空襲に使われた。また、近代兵器は使う側にとっても諸刃の剣となることがあった。1916年3月、アイルランド沖で、ドイツの潜水艦Uボートがイギリスの大西洋航路客船「ルシタニア号」を撃沈した。乗員乗客1850名のうち1198名が水死したが、犠牲者にアメリカ人乗客39人が含まれていた。この事件が、それまで名目上中立を維持していたアメリカを1917年4月にドイツに対して宣戦布告させる大きな要因となった。

近代兵器を用いた戦争は長期戦・総力戦となり、国内では非戦闘員を含めて国家総動員態勢がとられた。これは、当時の欧米社会を大きく変革した。工場生産の効率を上げるため、夏時間が導入された。出征した男性に代わって女性が職場へ進出し、働く女性のための託児所が整備された。欧米では女性参政権が実現した。たとえば、デンマークでは戦中の1915年に、ドイツは戦後ヴァイマル共和国となった1919年に、アメリカでは全州で1920年に、それぞれ女性参政権が実現した。

皮肉なことに、兵器のために開発された技術が民生品に利用され、普及した例もある。たとえば、塹壕（英語でtrench）に長期間留まるイギリス軍兵士のために、防水性の高いコートを開発したのが、バーバリー社とアクアスキュータム社だった。今や、トレンチ・コートはバーバリー社の代名詞である。それから、巨大大砲による砲撃の後、兵士が塹壕を飛び出して突撃するタイミングを厳密に合わせるため、士官は腕時計を身に付け、時刻を確認した。

日本は、日英同盟に基づき第1次世界大戦に連合国として参戦したものの、中国の青島への出兵、地中海への駆逐艦派遣など、戦闘への参加は限定的だった。むろん、日本の国土は空襲にさらされなかった。一般の人が家族に語り継ぐような戦争体験はほとんどなかったといえる。

しかし、第1次世界大戦は20世紀の枠組みを決めた戦争である。大戦前夜には列強による少数民族の圧迫、民族間の対立など、紛争の火種が蓄積されていた。直接の導火線となった1914年6月28日のサラエボ事件は、オーストリア＝ハンガリー帝国による多民族の支配にくわえ、バルカン半島における複雑な民族問題の存在が背景にあった。大戦後、列強は敗戦国の領域と植民地を分割し、言語・宗教の異なる少数民族をむりやり1つにまとめ、問題をいっそう複雑にした。その影響は、1990年代の旧ユーゴスラビアの分裂、1993年のチェコスロバキアの分離にも表われた。

バルカン半島における対立は、今日もなお続いている。20世紀末の1999年3月にはコソボ紛争が発生し、北大西洋条約機構（NATO）が域外に軍隊を初めて派遣した。2008年、セルビア南部の自治州だったコソボはセルビアからの独立を宣言した。だが、ロシアが独立を承認していないため、コソボは国連にオブザーバーとして参加する。国連への加盟には安保理の勧告が前提だからである。2010年7月、オランダ・ハーグにある国際司法裁判所（ICJ）が勧告的意見を発表し、コソボのセルビアからの一方的な独立宣言は国際法に反しないという結論を出した。これに対し、セルビアは反発を強めている。

このように、第1次世界大戦について学ぶことは、現代史の重要部分であるばかりでなく、人類が今日抱える大半の紛争の原因と経過を理解することにつながる。一方、宗教的対立と民族紛争に比較的縁遠かった日本人にとって、多民族国家オーストリア＝ハンガリー帝国、「ヨーロッパの火薬庫」バルカン半島の状況は、理解することも想像することもたやすくはない。旧ユーゴスラビアは地理的に遠く、スラヴ系の言葉は英語やフランス語と大きく異なる。旧ユーゴスラビア諸国は日本の主要な貿易相手国ではないので、なおさら関心は薄くなる。くわえて、少子化による入学者確保のため私立大学が入学試験を簡素化していたこと、高校で必修の世界史を別の科目または時間で履修したと見なしたこと（いわゆる世界史未履修問題）も、世界史の学習環境にネガティブな影響を及ぼした。

近年、補習を行うリメディアル教育の必要性が盛んに唱えられている。日

本リメディアル教育学会 (<http://www.jade-web.org/>) の専門部会に、英語、日本語、理数系、学習支援ICT活用教育の部会はあるが、世界史あるいは歴史教育はない (<http://www.jade-web.org/jade/branch/branch.html>, 2010年8月24日アクセス)。また、名古屋大学高等教育研究センター (<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>) は、「成長するティップス先生Ver. 1.2 名古屋大学版ティーチング・ティップス」(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/>) で、大学の講義の教授法についてヒントを提供しているが、主にコースデザインや講義運営方法など、教員の教育力向上に関する提案である。新入生全体の基礎学力不足、または急激な低下に対する組織的な解決法を提供するものではない。

このような状況を打開する試みの1つとして、筆者は2009年の春学期と秋学期に「世界市民一戦争の世界史」をそれぞれ開講し、宗教改革から冷戦終結後までの約500年間を計13回に分け、毎回1つのトピック（戦争、紛争、革命等）を取り上げた。講義には、通常の説明にくわえて、映画、ドキュメンタリー・フィルム、書画、各種ホームページなどの映像（とくに動画）を積極的に教材として用いた。本稿は、2009年度世界市民の講義ノートと学生に配布した講義レジメを元に、第1次世界大戦を描いた映画を厳選した上で、高度な学習に発展させるための関連サイトを新たに付記したものである。

桃山学院大学の「世界市民」は1年次生の必修科目で、経済・社会・経営・国際教養・法学部の全学部の学生が1つのクラスで履修する。受講生は皆文系ではあるものの、歴史への関心は人それぞれである。そこで講義ノートを準備するにあたり、映画、ドキュメンタリー番組など、広く情報を収集した。とくに有用と思われる作品は、予め場面を精査して、講義の理解を促進するために、連続または断続的に計10-20分程度、教室内で呈示した。

映像、とくに動画を見せるタイミングは、筆者が長年講義で試行錯誤してきた経験から、①講義冒頭、②講義の半ば、および③講義終了の前、の3つが考えられる。①、②、③にはそれぞれに利点がある。①の講義冒頭で映像を見せると、その日のテーマを明確に示し、受講生の知的関心を高めることができる。②の講義の半ばで映像を見せると、教員の説明に関する小まとめ

となり、受講生の集中力が途切れるのを防ぐことが可能になる。③の講義終盤に提示すると、講義全体のまとめができ、内容の印象を強烈にして、受講生の記憶に残りやすくなる。

もちろん、①だけ、②だけ、③だけ、という方法ではなく、①と②、①と③、②と③、あるいは①②③の組み合わせもありえる。視聴覚教材を提示するタイミングと提示時間の決定は、その日の講義の進度、講義全体の進度、学期初め・学期半ば・学期末、その日の天候（とくに蒸し暑い天気）、時限（朝一番、昼食後すぐ、夕方）、曜日（週明け、週半ば、週末）などの条件を総合的に勘案する必要がある。

ところで、映画は常に史実に基づいているわけではない。ドキュメンタリー番組も、制作者の政治的意図・立場が反映されている。だが、大学生の世界史に対する「食わず嫌い」を治し、世界史は暗記を要求されるだけのつまらない科目だったという印象を拭い、歴史に対する知的関心を抱かせる上で、映像は非常に効果的である。それに、映画の筋立てと史実の違いを事前に解説する、映画に出てくる小道具の象徴的意味を説明する、制作者の国籍による立場の違いを認識させると、歴史のみならず、メディア・リテラシーの教育も行える。

本稿で紹介する映画は、日本で既に公開されており、作品の評価が高く、レンタル・ビデオ店などで入手が容易なものを中心に選んだ。学生がお気に入りのテレビ・ドラマのDVDを借りに行った際、歴史ものにも手を伸ばしてほしいためである。本屋や家電量販店のDVDコーナーで購入することも可能である。50年以上前に日本で公開された作品なら、「ワンコイン」(500円)で購入できるDVDは多い。クラシックの名作を4本まとめて1000円以下、という廉価なDVDも販売されている。

リストには、第1次世界大戦のみならず、冷戦終結後のバルカン半島、とくに旧ユーゴスラビア紛争を描いた映画を含めた。前述のとおり、第1次世界大戦の直接の発端はバルカン半島における少数民族と大国の対立だったが、前世紀の終わりにもボスニア紛争、コソボ紛争という形で武力紛争が起きた

からである。この種のテーマの映画は、どうしても日本未公開の作品が多い。DVD自体はインターネットで比較的たやすく購入できるだろうが、英語版や英語字幕はあっても、日本語版や日本語字幕がなく、視聴覚教材としては使いにくいかもしれない。だが、教員が内容を参考にし、教室内で風景や風俗を見せる分には大いに使えるであろう。

パレスチナ問題の複雑化は第1次世界大戦と大いに関係がある。1915～1916年にエジプトの高等弁務官マクマホンとメッカの知事フセインが交わした10通のフセイン・マクマホン書簡（アラブの独立と引き替えにオスマン帝国に対して反乱を起こす）、1916年5月のサイクス・ピコ協定（オスマン帝国の領土分割について、イギリス・フランス・ロシアが結んだ密約）、1917年11月にイギリス外相バルフォアが行ったバルフォア宣言（ユダヤ人にパレスチナでの建国を約束した）の3つの約束が、混乱に拍車をかけた。だが、パレスチナの歴史を描いた映画は、日本公開時に大々的に宣伝されるものが少ないため、ここでは割愛した。

各映画には、映画公式サイト（元々ない、あるいは映画公開時にはあったが現在は多い）、映画のテーマに関連した博物館、史跡、マスメディア、国際機関等のURLを付した。1つの番組の解釈や描き方に偏ることなく、様々な情報源の利用を促すためである。とくに、イギリスBBCの第1次世界大戦に関するサイトは秀逸である。貴重な映像を集め、視覚的にわかりやすだけでなく、ドイツを含む複数の国の歴史家が短いエッセイを掲載しており、「電気紙芝居」に終始しない。

より多くの方が関連サイトを読めるよう、日本語版がない場合は、なるべく英語版のURLを掲載した。だが、中には英語版すらないもの、あるいは英語から入っても途中で英語以外の言語になるものがある。最近では、外国語のサイトを日本語に翻訳する機能があるので、ぜひ英語圏以外のURLを含めて閲覧してほしい。翻訳のレベルは様々だが、まったく役に立たないわけではない。それに、イギリスBBCとアメリカPBSは客観的な報道で知られるが、両者のみを多用すると英米の見方に偏りかねないからである。

観光案内に関するサイトは、国または地方自治体が直接運営するもの、あるいは地方自治体から委託された民間企業が運営しているものを極力選んだ。ただし、読者が実際に外国を訪問する際、そのサイトを参照するよう筆者が推奨しているわけではない。それから、治安の問題はかなり悪化するまで日本で報道されないことが多い。政情が不安定の国、あるいは治安のよくない地域を訪問する人は、出発前に複数の情報源で現地の状況を確認してほしい。今日、外務省海外安全ホームページ (<http://www.anzen.mofa.go.jp/>) をはじめ、アメリカ国務省、イギリス外務省、在日の各国大使館、外国のニュース・メディアなど、情報の入手は20年前と比べてはるかに簡単になった。

本稿に記載したURLをそのまま打ち込んでも、サイトのページが出てこない場合がある。そういう時は、Googleなどの検索エンジンで、URL紹介したページのタイトルを入れてみる、URLの基本アドレス（例：<http://www.bbc.co.uk/>）から入って、キーワード検索するなど試みてほしい。とくにfirstworldwar.comの場合、いったんトップ・ページに入ってからキーワード検索をするか、Googleでfirstworldwar.comとURLの閲覧したいページの語句を入れた方が検索しやすい。

参考文献は、学生および教員双方のニーズに応えられるよう、初学者向けの文献（とくに世界史）、図や写真が多くて読みやすいのと同時に解説が充実している文献、国際機構論を中心とした専門的な文献（学部生向け）を取り混ぜた。読者がそれぞれのニーズや興味関心に合わせて利用してほしい。なお、参考文献一覧に定期行物の出版社名と出版年は記さないのが引用上の規則だが、生徒・学生が本稿を参照する可能性に鑑み、あえて出版社名と出版年を記した。

最後に、外国の地名・人名を日本語に取り入れる際、カタカナ表記が複数存在する場合がある。本稿では、外国の国名と地名はすべて、帝国書院等の地図で表記された方法に従う。この機会に、外国の国名と地名のカタカナ表記に関する状況を指摘したい。

『広辞苑』第6版（岩波書店）、『国際条約集』（有斐閣、年刊）、世界史の教

科書・辞典類ではVをヴと表記することが多い。たとえば、Yugoslaviaは地図で「ユーゴスラビア」となるが、『広辞苑』『国際条約集』、世界史の教科書・辞典類では「ユーゴスラヴィア」と表記する。その他、Bosnia Herzegovina（ボスニア・ヘルツェゴビナ）、Kosovo（コソボ）、Slovenia（スロベニア）、Slovakia（スロバキア）などが類似例として挙げられる。また、Greeceを地図は「ギリシャ」、『広辞苑』は「ギリシア」と表記する。

なかには、原語の音に忠実であろうとするあまり、読者を混乱させかねない例もある。山川出版社はSarajevoを「サラエヴォ」と表記し、『広辞苑』は「サラエヴォ」と表記しているが、ここでは地図の「サラエボ」に統一した。本稿には出てこないが、Jerusalemも同様に、地図と『広辞苑』が「エルサレム」で、山川出版社が「イエルサレム」となっている。

一般的に、マスメディアは「ヴ」を使わない。Versaillesの地図表記は「ヴェルサイユ」だが、新聞は「ベルサイユ」を使っている。Genève（フランス語）・Geneva（英語）も同様に、地図が「ジュネーブ」で、新聞は「ジュネーブ」である。ただし、スペイン語のvの綴りは発音が元々bの音なので、「ヴ」は使わない。

<参考文献>

- 「哀愁」『週刊20世紀シネマ館』No. 23（1949年）講談社 2004年
青木裕司『知識ゼロからの現代史入門：アメリカ・ロシア・中国・パレスチナの60年』幻冬舎 2002年
荒井信一『空爆の歴史：終わらない大量虐殺』岩波書店 2008年
池上彰『そうだったのか！現代史』集英社 2000年
池上彰『そうだったのか！現代史パート2』集英社 2003年
池田十吾『第一次世界大戦期の日米関係史』成文堂 2002年
入江昭『20世紀の戦争と平和』増補版 東大出版会 2000年
祝田秀全『忘れてしまった高校の世界史を復習する本』中経出版 2003年
J. エリス『機関銃の世界史』平凡社 2008年

映画で学ぶ第1次世界大戦（関連サイト付）

ロビン・オーキー著，三方陽子訳『ハプスブルク君主国1765-1918：マリア＝テレジアから第一次世界大戦まで』NTT出版 2010年

加藤雅彦『図説ハプスブルク帝国』河出書房新社 1995年

加藤雅彦『図説ヨーロッパの王朝』河出書房新社 2005年

神田文人，小林英夫編『決定版20世紀年表』小学館 2001年

ハラルド・クラインシュミット，吉田脩編集『帝国主義期ヨーロッパ外交の発展』復刻版 龍溪書写 2006年

国際地学協会『国旗と地図』国際地学協会 2004年

小林啓治『総力戦とデモクラシー：第一次世界大戦・シベリア干渉戦争』吉川弘文館 2008年

『最新版世界遺産』No. 8「ウィーンの歴史地区」講談社 2010年

『最新版世界遺産』No. 12「ヴェルサイユ宮殿と庭園」講談社 2010年

桜井哲夫『戦争の世紀：第一次世界大戦と精神の危機』平凡社 1999年

篠原初枝『国際連盟』中央公論新社 2010年

柴宜弘『図説バルカンの歴史』改訂新版 河出書房新社 2006年

成美堂出版編集部編『一冊でわかるイラストでわかる宗教史』成美堂出版
2008年

「西部戦線異状なし」『週刊20世紀シネマ館』No. 36（1925-30年）講談社 2004年

高木徹『ドキュメント戦争広告代理店：情報操作とボスニア紛争』講談社
2002年

ジョナサン・B. タッカー著，内山常雄訳『神経ガス戦争の世界史：第一次世界大戦からアル＝カーイダまで』みすず書房 2008年

多谷千香子『「民族浄化」を裁く：旧ユーゴ戦犯法廷の現場から』岩波書店 2005年

「地球の歩き方」編集室『クロアチア：世界遺産と島めぐり』ダイヤモンド社 2007年

「チャップリンの独裁者」『週刊20世紀シネマ館』No. 20（1960年-②）講談

社 2004年

辻原康夫『図説国旗の世界史』河出書房新社 2003年

フィリップ・ナイトリー『戦争報道の内幕：隠された真実』中央公論新社 2004年

中野京子『名画で読み解くハプスブルク家12の物語』光文社 2008年

『週刊日録20世紀1914（大正3年）』講談社 1998年

『週刊日録20世紀1915（大正4年）』講談社 1998年

『週刊日録20世紀1916（大正5年）』講談社 1998年

『週刊日録20世紀1917（大正6年）』講談社 1998年

『週刊日録20世紀1918（大正7年）』講談社 1998年

『週刊日録20世紀1919（大正8年）』講談社 1998年

野島博之監修『一冊でわかる，イラストでわかる図解日本史』成美堂出版 2006年

馬場優『オーストリア＝ハンガリーとバルカン戦争：第一次世界大戦への道』法政大学出版局 2006年

林健太郎『第一次世界大戦後のドイツと世界』山川出版社 1993年

平間洋一『第一次世界大戦と日本海軍：外交と軍事との接続』慶應義塾大学出版会 1998年

広野好彦『日本外交史ノート：第一次世界大戦から現代まで』晃洋書房 2004年

「武器よさらば」『週刊20世紀シネマ館』No. 15（1958-①）講談社 2004年

ブライアン・ボンズ『イギリスと第一次世界大戦：歴史論争をめぐる考察』芙蓉書房出版 2006年

前澤桃子『図解雑学日本の歴史』ナツメ社 2006年

まがいまさこ，堀洋子『もう一度学びたい世界の歴史』西東社 2005年

水村光男監修『この「戦い」が世界史を変えた』青春出版社 2003年

最上敏樹『国連とアメリカ』岩波書店 2005年

ニック・ヤップ『世界を変えた100日：写真がとらえた歴史の瞬間』日経ナシ

映画で学ぶ第1次世界大戦（関連サイト付）

ヨナル・ジオグラフィック社 2008年

山上正太郎『第一次世界大戦：忘れられた戦争』社会思想社 1985年

山崎広明編『もういちど読む山川政治経済』山川出版社 2010年

山本博文『こんなに変わった歴史教科書』東京書籍 2008年

横田洋三編『国連による平和と安全の維持：解説と資料』国際書院 2000年

横田洋三編『国連による平和と安全の維持：解説と資料』第2巻 国際書院
2007年

読売新聞20世紀取材班『欧州大戦』中央公論新社 2001年

読売新聞20世紀取材班『アメリカの世紀』中央公論新社 2002年

渡辺和子監修『もう一度学びたい世界の宗教』西東社 2005年

Caygill, Marjorie. *The British Museum Reading Room*. London: The Trustees of The British Museum, 2000.

Nelson, Michael, ed. *The Presidency A to Z: A Ready Reference Encyclopedia*. Revised edition. Washington: Congressional Quarterly, 1994.

<映画>

(1) 「西部戦線異状なし」(1930年, アメリカ)

原題All Quiet on the Western Front。原作は、1916年に18歳で学徒志願兵になったドイツ人作家エーリッヒ・レマルク (Erich Maria Remarque, 1898-1970) の同名小説で、処女作だった。ドイツ語原題はIm Westen Nichts Neues。

独仏両軍が対峙する西部戦線。最新型機関銃が登場した大戦の悲惨さは、教師に煽られて教室から志願してきた若者たちの想像を遙かに超えた。

映画には新人俳優が起用され、戦争に疑問を呈すセリフで、プロパガンダ的な戦争映画と一線を画した。映画史上初の反戦映画は、第3回アカデミー作品賞および監督賞を受賞した。主人公の級長ポールを演じたルー・エイヤーズ (Lew/Lewis Ayers, 1908-1996) は反戦思想に目覚めて第2次世界大戦の徴兵を拒否し、一時アメリカ国内で反感を買った。

ヒトラー政権下の1933年、原作は焚書にされた。既にスイスへ移住していたレマルクは1938年にドイツ国籍を剥奪され、1941年にアメリカへ亡命した。アメリカでヒット作を出せなかったレマルクを支援したのが、同じドイツ出身の女優マレーネ・ディートリヒ（Marlene Dietrich, 1901-1992）だった。

映画の日本初公開は1930年だった。軍国主義が高まりつつあった時代で、検閲で大幅にカットされた。それでも映画は大ヒットし、「〇〇戦線異状なし」が流行語となった。完全な形で公開されたのは、戦後20年経った1965年だった。

<関連サイト>

*NHK「アカイさんノート NHKスペシャル 映像の世紀」

<http://www.nhk.or.jp/archives-blog/2008/11/eizo20c.html>

「映像の世紀」は、NHKが創立70周年に際し、アメリカABCと制作したシリーズ。「映像の世紀 第2集 大量殺戮の完成」（1995年4月15日放送）は、機関銃、毒ガス、戦車と近代兵器が発展し、前線の兵士の人間性が押しつぶされていく様が描かれる。

番組を共同制作したNHKとアメリカABCが世界中で200を超える公文書館等に連絡をとり、貴重な映像を収集した。一方、再現ドラマは作らず、存命中の個人に対するインタビューもあえて行わなかった。

アカイさんは、「NHKアーカイブスのことなら何でも知っている謎のおじさん」という設定のキャラクター。番組ノートで、番組制作の意図を詳しく解説する。

*Turner Classic Movies “Biography for Lew Ayers”

<http://www.tcm.com/tcmdb/participant.jsp?spid=7465>

*BBC (UK) “World War One—The Trenches: Virtual Tour—Life in The Trenches: Virtual Tours”

http://www.bbc.co.uk/history/worldwars/wwone/launch_vt_wwone_trench.shtml

塹壕での兵士の生活が動画で収録されている。また、同じ項目には、飛

行機の戦闘，塹壕の前線が掲載されている。カラー映像なので，白黒と比べてリアリティがはるかに増す。

*BBC (UK) “World War One—The Human Experience of War—The Human Face of War” by Helen Cleary, Last updated 2009-11-05

http://www.bbc.co.uk/history/worldwars/wwone/humanfaceofwar_gallery.shtml

*BBC (UK) “World War One—The Human Experiences of War—World War One Movies”

http://www.bbc.co.uk/history/worldwars/wwone/launch_ani_wwone_movies.shtml

Chapter 1: Volunteering and recruitment

Chapter 2: Night patrol

Chapter 3: Life in the trenches

Chapter 4: Over the top

Chapter 5: Gas attack

Chapter 6: Injury and shell shock

Credits

*firstworldwar.com “Battles-The Western Front”

<http://www.firstworldwar.com/battles/wf.htm>

*Department of Veterans’ Affairs and Board of Studies NSW (Australia) “Australians on the Western Front 1914-1918”

<http://www.wwlwesternfront.gov.au/>

*The Great War 1914-1918 (UK) “A Guide to WW1 Battlefields and History of the First World War”

<http://www.greatwar.co.uk/>

*Western Front Association United States Branch (USA)

<http://www.wfa-usa.org/>

*Musée de l’Armée/TheMuseum of the Army (France)

http://www.invalides.org/pages/anglais/menu_ang.html

パリにある軍事博物館。フランスの皇帝だったナポレオンの墓所でもあるアンヴァリッド（Hôtel des Invalides。廃兵院）の中にある。

***Arc de Triomphe d'Etoile (France)**

<http://en.parisinfo.com/museum-monuments/3/arc-de-triomphe-centre-des-monuments-nationaux>

エトワール凱旋門は、シャンゼリゼ通りにある、パリで最も有名な凱旋門。1920年11月11日、150万人の戦没者を悼むため、無名戦士の墓がエトワール凱旋門に置かれた。1922年以来、第2次世界大戦中も含めて、毎夕6時半に慰霊の式典が行われ、追悼の火が燃やされる。

(2) 「ジョニーは戦場へ行った」(1971年, アメリカ)

原題Jonny Got His Gun。1939年に発表されたドルトン・トランボの原作小説は、両手、両足、耳、眼、口を失い、第1次世界大戦が終わってから15年近く生き続けた実在のイギリス人将校をヒントに書かれた。

戦争で両手両足を失い、延髄と性器と心臓のみが機能する青年。彼は、姓名不詳の重傷兵第407号として、陸軍病院のベッドの上で生かされていた。自分の意思を伝えるために、かすかに動く首を使ってモールス信号を送る。映画の日本初公開は1973年だった。

<関連サイト>

***Guardian (UK) “First World War”**

<http://www.guardian.co.uk/world/firstworldwar/>

***Australian War Memorial (Australia) “Remembrance Day”**

<http://www.awm.gov.au/commemoration/remembrance/>

(3) 「突撃」(1957年, アメリカ)

原題Paths of Glory。大砲の轟音と機関銃の連射音が響く中、フランス軍歩兵連隊は自殺行為に等しい命令を受け、塹壕を飛び出してドイツ軍に突撃し

た。攻撃は失敗に終わった。しかし、敵陣逃亡をしたとして、3名の兵士が軍法会議にかけられる。弁護士出身のダックス大佐は3名のために必死の弁護を試みるが。

(4) 「戦場のアリア」(2005年, ドイツ・フランス・イギリス)

原題Joyeux Noël (英語でMerry Christmas)。機関銃の登場で戦線は膠着し、戦場で初めてのクリスマス・イブがくる。著名なオペラ歌手だったドイツ軍兵士が、塹壕で夜警の当番をする仲間たちのために、クリスマス・キャロルの歌を歌った。歌の力は奇跡を呼び、ドイツ軍とフランス軍・スコットランド軍のクリスマス休戦が成立する。ともにクリスマスを過ごした敵軍は、互いを敵として見るができなくなった。中には、両陣営を頻繁に往き来する者まで現われた。しかし、国境を越えた友情がいつまでも許されるはずがなかった。

1914年12月、西部戦線では実際にクリスマス休戦(The Christmas Truce)が複数の場所で自発的に行われた。この史実に触発され、また、他の実際にあったエピソードを組み合わせて脚色し、映画の筋が作られた。

映画では、フランス人の話す英語、スコットランド人の話すスコットランド訛りの英語、ユダヤ系ドイツ人の話す英語、フランス語、ドイツ語が飛び交う。凍てつく戦場で行われたクリスマス・イブのミサは、ラテン語で執り行われた。キリスト教の宗派の違いこそあれ、ラテン語は戦場で唯一の「共通語」だった。

<関連サイト>

*映画オフィシャルサイト

<http://www.kadokawa-pictures.co.jp/official/aria/>

*firstworldwar.com “Feature Articles—The Christmas Truce”

<http://www.firstworldwar.com/features/christmastruce.htm>

*Independent (UK) “Veteran of First World War ‘Christmas truce’ dies at 109” by Paul Kelbie, Scotland Correspondent, Tuesday, 22 November

2005

<http://www.independent.co.uk/news/uk/this-britain/veteran-of-first-world-war-christmas-truce-dies-at-109-516432.html>

*BBC (UK) “The Christmas truce” Tuesday, 3 November 1998, 11:26 GMT

http://www.bbc.co.uk/2/hi/special_report/1998/10/98/world_war_i/197627.stm

*History Channel (USA) “This day in history/12 25, 1914 The Christmas Truce”

<http://www.history.com/this-day-in-history/12/25>

*History Channel (USA) “Christmas Truce of 1914”

<http://www.history.com/topics/christmas-truce-of-1914>

上述の番組のDVD（英語版）。ASIN B000T28PJ2。

*Links to 1914 Christmas Truce Web Sites and the Truce on You Tube

<http://faculty.fullerton.edu/bstarr/CHRISTMAS%20TRUCE%20LINKS.htm>

California State University at Fullerton内のサイト。

(5) 「戦場よさらば」(1932年, アメリカ)

原題A Farewell to Arms。原作は、アメリカの文豪ヘミングウェイ（Ernest Hemingway, 1899-1961）の作品『武器よさらば』（1929）である。アメリカ人男性がイタリア軍に志願して救護班に配属された。休暇で一時帰郷した際、イギリス赤十字社の看護婦と恋に落ち、2人は結ばれる。だが、男は戦場へ戻らなければならなかった。

本作の主演は、「アメリカの良心」を体現したゲイリー・クーパー（Gary Cooper, 1901-1961）である。彼の演じる人物は、つねに強くて善良だった。1933年の日本初公開時に原題が不適切として、タイトルが「戦場よ〜」に変更された。1957年、ロック・ハドソン主演でリメイクされ、日本では1958年

に原作および原題の通り、「武器よさらば」のタイトルで公開された。

ちなみに、1936年にスペイン内乱が始まると、ヘミングウェイは義勇兵として参加し、フランコ將軍の軍と戦った。そのときの体験をもとに、『誰がために鐘は鳴る』を著し、1940年に出版した。これを原作として、ゲリラ戦を行うアメリカの大学教授とスペイン娘の恋を描いた映画「誰が為に鐘は鳴る」（1943年、アメリカ）が誕生した。映画邦題は原作小説と異なり、「ため」ではなく「為」の字を使用する。映画の主演はゲイリー・クーパーで、情熱的なスペイン娘を演じたのはスウェーデン出身のイングリッド・バーグマン（Ingrid Bergman, 1915-1982）だった。

<関連サイト>

*日本ヘミングウェイ協会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/hsj2/>

*The Hemingway Society (USA)

<http://www.hemingwaysociety.org/>

*The Ernest Hemingway Home & Museum (USA)

<http://www.hemingwayhome.com/>

(6) 「ザ・トレンチ<塹壕>」(1999年、イギリス)

原題The Trench。第1次世界大戦の激戦の1つ、ソンムの戦いを描いた。ソンムはフランス北部の川で、1916年7月から同年11月まで死闘が繰り返された。初日にイギリス軍だけで戦死者約2万人、負傷者約6万人を出した。1916年9月15日にイギリスが初めて戦車を投入した。最終的に、死傷者数はイギリス軍40万、フランス軍20万、ドイツ軍45万にのぼった。

トレンチ・コートは、イギリス兵が泥水だらけの寒い塹壕で着るために、イギリス軍の依頼でバーバリー社（Burberry）とアクアスキュータム社（Acuascutum）が開発した。腕を楽に回せるラグラン袖は、アクアスキュータム社の考案である。

アクアスキュータム社は、ロンドンのリージェント街（Regent Street）で

高級仕立服の店として始まった。社名は造語で、ラテン語の水 (aqua) と盾 (scutum) を組み合わせた。1990年、同社は日本のレナウン社に買収されたが、レナウンは2010年7月、中国企業の第三者割当て増資と社外取締役3名を受け入れると発表した。ゆえに、アクアスキュータム社は中国資本の傘下にあるといえる。

<関連サイト>

*Aquascutum “timeline—1910s”

<http://www.aquascutum.co.uk/aboutus/timeline/timeline.php/1910s/?i=3>

*レナウン社「アクアスキュータム」

<http://www.renown.com/brand/ladies/aquascutum/>

*Imperial War Museum—The Battle of the Somme (UK)

<http://www.iwm.org.uk/server/show/nav.00o>

ロンドンの帝国戦争博物館は、第1次世界大戦中の1917年に設立された。

*BBC (UK) “Battle of the Somme: 1 July - 13 November 1916”

http://www.bbc.co.uk/history/worldwars/wwone/battle_somme.shtml

*BBC (UK) “Animated Map: Battle of the Somme”

http://www.bbc.co.uk/history/worldwars/wwone/launch_ani_somme_map.shtml

*PBS (USA) “The Battle of the Somme”

http://www.pbs.org/greatwar/maps/maps_somme.html

*firstworldwar.com “Battles—The Battle of the Somme, 1916”

<http://www.firstworldwar.com/battles/somme.htm>

(7) 「バルトの楽園 (がくえん)」(2006年, 東映)

徳島県鳴門市にあった板東俘虜収容所のドイツ人捕虜により、日本で初めてベートーヴェンの第九交響曲が演奏された。映画の筋はフィクションが多いので、必ずドキュメンタリー番組を合わせて鑑賞してほしい。映画の最

映画で学ぶ第1次世界大戦（関連サイト付）

後に、「帝王」ヘルベルト・フォン・カラヤンが指揮したベルリンフ・フィルハーモニー管弦楽団の音源を利用した第九が演奏される。

題名の「バルト」（ドイツ語でヒゲの意）は、収容所所長だった松江豊寿が立派なヒゲを生やしていたことに由来する。会津藩の出身だった松江は、戦争捕虜に対して同情的だったといわれる。

ベートーヴェンの第九は各国のプロパガンダに利用された歴史を持つ。だが、人間としての喜びを希求するメロディは、時代と体制を超えて共通する感動を生む。現在では、欧州連合（EU）の国歌にもなっている。

<関連サイト>

* 徳島県立図書館 板東俘虜収容所関係資料

http://alislibopac.tokushima-ec.ed.jp/cgi-bin/Sopcastmi.sh?dtssl=16&list_cnt=50&p_mode=1

* 鳴門市「板東俘虜収容所遺構の発掘」

http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/germanhouse/ruhe/no_19.pdf

* 鳴門市秘書広報課「『板東俘虜収容所』が残した遺産から・・・～鳴門市とドイツとの国際交流～」

http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/town/175_2/index.html

* 鳴門教育大学付属図書館特別展 「『松江豊寿と二つの俘虜収容所』概要」
平成18年5月31日（土）～6月11日（日）

<http://opac.lib.naruto-u.ac.jp/home/Tenzi200605/gaiyo.pdf>

<http://www.lib.naruto-u.ac.jp/Tenzi200605/siryu.html>

* 鳴門教育大学付属図書館展示会 徳島日独協会副会長 林啓介「徳島俘虜収容所」

http://www.lib.naruto-u.ac.jp/home/Tenzi200605/comment_hayasi.html

* 鳴門市ドイツ館

<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/germanhouse/>

* 会津若松市「『バルトの楽園』公開記念 松江豊寿特集」

<http://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/j/rekishi/bart/index.htm>

* Beethoven Haus (Beethoven Digitally)

http://www.beethoven-haus-bonn.de/sixcms/detail.php?template=portal_en

ドイツのボンにあるベートーヴェンの生家を博物館にした。大作曲家が誕生した部屋などを見学できる。Virtual Visitで各部屋を訪ねると、カメラが360度のアングルで動く。ベートーヴェンのデスマスクも所蔵する。

Digital Archivesが充実している。

* ベートーヴェン・ハウス ボン「音楽の力。1917-1919年板東（日本）におけるドイツ捕虜収容所の文化的生活 ベートーヴェン・ハウス ボン 特別展示会」

<http://www.beethoven-haus-bonn.de/sixcms/detail.php/43872>

上述のBeethoven Hausトップページにある日本国旗をクリックしても、このアドレスに入れる。

* 国立音楽大学音楽研究所ベートーヴェン研究部門

<http://www.ri.kunitachi.ac.jp/lvb/index.html>

* 国立音楽大学研究年報論文および報告（1999-2004年度）

<http://www.ri.kunitachi.ac.jp/lvb/rep/rep.html>

ベートーヴェンの音楽に関する研究論文の目次が掲載されている。

* NHK「その時歴史が動いた 第118回 ベートーヴェン第九誕生！～民衆に自由を呼びかけた交響曲～」(2002年12月18日放送)

http://www.nhk.or.jp/sonotoki/2002_12.html#03

ベートーヴェンは、ナポレオンが身分制度のない社会を作ると期待し、彼に捧げるべく交響曲「ボナパルト」(ナポレオンの姓)を書いていた。しかし、皇帝即位の報を聞いたベートーヴェンは怒り、交響曲の題名を「英雄(エロイカ)」に書き換える。ウィーン体制で思想統制が始まると、ウィーンの人々は享乐的になった。難聴に苦しむ作曲家がとった行動とは。

* The European Union “European Symbols”

http://ec.europa.eu/delegations/tajikistan/what_eu/european_symbols/index_en.htm

(8) 「哀愁」(1940年, アメリカ)

原題Waterloo Bridge。1930年のアメリカ映画「ウォタールウ橋」(原題Waterloo Bridge)のリメイク。ヒロインの職業など、本作の設定は1930年の映画と若干異なる。1940年の映画で主演したのは、前年に「風と共に去りぬ」で主演したヴィヴィアン・リー (Vivien Leigh, 1913-1967) と、美男子で知られたロバート・テイラー (Robert Taylor, 1911-1969) である。

第1次大戦下のロンドン。バレリーナのマイラは、名家の出身で軍人のロイと恋仲になる。だが、彼女はバレエ団の経営者ににらまれ、彼女を弁護した友人のキティとともに解雇された。

ある日、マイラはロイの戦死を新聞で知り、その場で卒倒した。意識を取り戻した彼女は、キティが売春婦になってまで彼女を支えていたことを知る。やがて、マイラもウォータールー橋の周辺に立つようになった。

ある日、マイラがいつものように客引きのため駅に立っていたところ、ロイが汽車から降りてきた。戦死公報は誤報だった。結婚の準備のため、ロイはマイラを実家へ連れて行くのだが。

1939年9月3日、再びフランス戦線に向かう前夜、ロイはマイラとの思い出があるウォータールー橋に1人たたずんでいた。

日本初公開は戦後の1949年だった。映画に触発された菊田一夫が、ウォータールー橋を東京・有楽町(住所は銀座5丁目)の数寄屋橋に置き換え、1952年にラジオドラマ「君の名は」を発表した。

<関連サイト>

*Visit Britain—British Tourist Authority ようこそ、イギリスへ!

<http://www.visitbritain.com/ja/JP/>

*Visit London—Official City Guide & London Hotels (UK)

<http://www.visitlondon.com/>

*Transport for London (UK)

<http://www.tfl.gov.uk/>

*Tour UK (UK) “Waterloo Bridge, Embarkment Embarkment and Waterloo, London WC2 and SE1”

http://www.touruk.co.uk/london_bridges/waterloo_bridge1.htm

*“Waterloo Bridge” *Survey of London*, vol. 23 (1951)

Chapter 3 Waterloo Bridge

<http://www.british-history.ac.uk/report.aspx?compid=47032>

(9) 「アラビアのロレンス」(1962年, イギリス)

原題Lawrence of Arabia。考古学者のロレンス（「ローレンス」とも表記。Thomas Edward Lawrence, 1888-1935）は、イギリス諜報部に情報を提供し、アラブの諸民族がオスマン帝国に反乱を起こすよう工作していた。砂漠の雄大な光景を表したようなテーマ音楽が美しい。アカバ（Aqaba）港攻略のシーンは圧巻である。ただし、アラブ人のロレンスに対する印象は映画と全く異なる。

<関連サイト>

*公式サイト ヨルダンツーリズムボード

<http://www.visitjordan.com/>

ヨルダンの観光案内Visit Jordan (<http://www.visitjordan.com/>)の日本語版。

*ヨルダンツーリズムボード「港」

http://www.visitjordan.com/visitjordan_cms/Default.aspx?tabid=109

アカバ港の写真と簡単な解説が掲載されている。

*Republic of Turkey Ministry of Culture and Tourism (Turkey) “Topkapi Palace”

<http://www.topkapisarayi.gov.tr/eng/indexalt.html>

*The Metropolitan Museum of Art (USA) “Heilbrunn Timeline of Art His-

tory—The Greater Ottoman Empire, 1600-1800”

http://www.metmuseum.org/toah/hd/grot/hd_grot.htm

(10) 「ヴェルダン 歴史の幻想」(1928年, フランス)

原題Verdun, Visions d’Histoire。ヴェルダンはフランス北東部の都市で、1916年2月から同年6月までヴェルダンの戦いが行われた。第1次世界大戦最大の激戦の1つで、独仏軍合わせて3万人が戦死し、75万人が負傷したという。

前述の映画「戦場のアリア」では、クリスマス停戦をきっかけにドイツ軍と親しくなったフランス陸軍がヴェルダンへ移送される。そして観客は、兵士の大半が生きて故郷に戻れないことを知る。

<関連サイト>

* International Movie Database “Verdun, Visions d’Histoire”

<http://www.imdb.com/title/tt0020547/>

* PBS (USA) “1914-1918 The Great War and the Shaping of the 20th Century”

<http://www.pbs.org/greatwar/>

* PBS (USA) “The Battle of Verdun”

http://www.pbs.org/greatwar/maps/maps_verdun.html

* BBC (UK) “Battle of Verdun: 21 February 1916-July 1916”

http://www.bbc.co.uk/history/worldwars/wwone/battle_verdun.shtml

* Imperial War Museum (UK) “The Battle of Verdun”

<http://www.iwm.org.uk/searchlight/server.php?show=nav.24349>

* AFP通信 『『ヴェルダンの戦い』90周年式典, シラク大統領も出席—フランス』(2006年6月26日 06:25)

<http://www.afpbb.com/article/politics/2076157/677831>

(11) 「マタ・ハリ」(1932年, アメリカ)

原題Mata Hari。主人公は、芸名をマタ・ハリ、本名をマルガレーテ・ゲールトライダ・ツェレ (Margaretha Geertruida Zelle, 1876-1917) という。オランダ出身だったが東南アジアの血を引き、エキゾチックな容貌をしていた。残された多数の写真を見ても、妖艶な雰囲気が伝わってくる。

1917年10月、踊り子マタ・ハリはドイツ軍のスパイH-21号として、パリ郊外でフランス軍に処刑された。どの程度スパイをしていたのか不明の点が多いが、マタ・ハリは伝説となり、女スパイの代名詞となった。生まれ故郷のオランダ・リーワルデン (Leeuwarden, the Netherlands) の町には、マタ・ハリの銅像が立つ。

本作は伝説の女優グレタ・ガルボ (Greta Garbo, 1905-1990) が主演した。他に、ジャンヌ・モロー (Jeanne Moreau, 1928-) が主演した1965年のフランス映画「マタ・ハリ」(原題Mata Hari, Agent H-21) もある。どちらの映画も、史実に基づく作品というより、主演女優の演技を楽しむべきものであるが、歴史の学習をより興味深くするために記した。

<関連サイト>

*International Spy Museum (USA) “Mata Hari”

<http://www.spymuseum.com/pages/agent-hari-mata.html>

*Fries Museum (The Netherlands) “More Mata Hari”

<http://www.friesmuseum.nl/index.php?id=1984>

*Mata Hari Com “Mata Hari-Photo Gallery”

<http://www.mata-hari.com/mata-hari-pictures.html>

*BBC (UK) “Mata Hari ‘was framed’ ” by Hugh Schofield in Paris, Tuesday, 16 October 2001, 12:22 GM 13:22 UK

<http://news.bbc.co.uk/2/hi/europe/1602486.stm>

*firstworldwar.com “Who’s who-Mata Hari”

<http://www.firstworldwar.com/bio/matahari.htm>

*Leeuwarden Tourism (The Netherlands)

<http://www.planetware.com/netherlands/leeuwarden-nel-fr-leeu.htm>

* Gemeente Leeuwarden (The Netherlands)

<http://www.leeuwarden.nl/>

(12) 「チャップリンの独裁者」(1940年, アメリカ)

原題The Great Dictator。映画の舞台の大半は戦間期だが、冒頭に第1次世界大戦の場面がある。トメニア軍（ドイツ軍を暗示）の伍長として出征したユダヤ人の床屋が、巨大大砲に振り回される。また、飛行機から手で爆弾を投げつける。

第1次世界大戦で機関銃が普及したため、騎兵や歩兵による突撃は実質的に困難となった。そこで、遠方から巨大大砲で弾丸を撃ち込み、塹壕内の敵軍をできるかぎり死傷させた後に歩兵が突撃する、という戦法が用いられた。

飛行機は、発明から約10年間で戦争の道具になった。1957年10月、ソ連が人類初の人工衛星スプートニク1号の打ち上げに成功し、宇宙時代の幕開けとなった。そして1969年7月、アメリカのアポロ11号が人類初の月面着陸に成功した。軽気球がフランスで18世紀後半に発明され、1899年の第1回ハーグ平和会議で戦争での使用が規制されるのに約100年かかったことと比べると、飛行技術の進歩はまさに日進月歩である。

<関連サイト>

* Charlie Chaplin Official Website

<http://www.charliechaplin.com>

* Chaplin Museum (Switzerland)

<http://www.chaplinmuseum.com/>

* 日本チャップリン協会

<http://www.chaplinjapan.com/>

* National Air and Space Museum (USA) “collections”

<http://www.nasm.si.edu/collections/>

アメリカの首都ワシントンにあるスミソニアン協会（Smithsonian Institute）の航空宇宙博物館（NASA）には、ライト兄弟が初飛行に成功し

たフライヤー 1 号, 1957年にソ連が打ち上げたスプートニク 1 号の模型, アポロ計画で採取された月の石が展示されている。ホームページのCollectionsまたはExhibitionsから入ると, 展示品の内容がわかりやすい。Exhibitions—OnView—Milestones of Flightと入ると, 飛行の歴史を概観できる。

* Steven F. Udvar-Hazy Center, National Air and Space Museum (USA)

<http://www.nasm.si.edu/udvarhazy/>

航空宇宙博物館の別館には, 2つの世界大戦で使用された戦闘機, 広島に原爆を投下したエノラ・ゲイ号 (Boeing B-29 Superfortress *Enola Gay*), スペース・シャトルなどの実物が展示されている。別館は, ワシントン郊外にあるヴァージニア州のダレス空港から, 専用シャトルバスで約5分の距離にある。

* [firstworldwar.com](http://www.firstworldwar.com) “Encyclopedia—Observation Balloons”

<http://www.firstworldwar.com/atoz/balloons.htm>

第1次世界大戦では飛行機の他に, 飛行船も攻撃に用いられた。

(13) 「レッズ」(1981年, アメリカ)

原題Reds。1917年の第2次ロシア革命を体験したアメリカ人記者ジョン・リード (John Silas Reed, 1887-1920) が主人公。リードは『世界をゆるがした十日間』の著者である。

映画には, アメリカ在住で当時を知る知識人の回想が挿入されている。

<関連サイト>

* The Official site of the Russian President (Russia)

<http://eng.kremlin.ru/>

* The Official Website of the Government of the Russian Federation (Russia)

<http://www.government.ru/eng/#>

* 外務省「各国・地域情勢 欧州 ロシア」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/russia.index.html>

* 在ロシア日本国大使館

<http://www.ru.emb-japan.go.jp/japan/index.html>

* 在日ロシア連邦大使館

<http://www.russia-emb.jp/>

* Russian Museum Info

<http://www.russianmuseums.info/>

* Lenin Museum (Russia)

<http://www.stel.ru/museum/Lenin.htm>

* J. Stalin's State Museum (Georgia)

<http://www.stalinmuseum.ge/museum/>

* 日本トルストイ協会

<http://chobi.net/~tolstoy/>

* The L. N. Tolstoy State Museum (Russia)

<http://www.russianmuseums.info/M299>

* Reading Room, The British Museum (UK)

http://www.britishmuseum.org/the_museum/history_and_the_building/reading_room.aspx

* Queen Elizabeth II Great Court, The British Museum (UK)

http://www.britishmuseum.org/the_museum/history_and_the_building/great_court.aspx

* The British Library (UK)

<http://www.bl.uk/>

1848年のドイツ革命が失敗に終わると、翌1849年にカール・マルクス (Karl Marx, 1818-1883) はロンドンへ亡命した。1950年から、大英博物館閲覧室 (Reading Room, the British Museum) の机で毎日勉強した。いくつもの著作を発表した後、1867年に資本主義社会を分析した『資本論』 (Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie) 第1巻を刊行した (『資本論』は全3巻)。

マルクスは、1850年6月に初めて利用者証（Reader's Ticket）を得てから、30年近く閲覧室を利用したが、どの机を利用したかは不明である。おそらく、歴史関係の参考図書が多いKからP列の間と考えられている。

当時、利用者証を得るには、大英博物館の職員、貴族などの推薦が必要だった。ちなみに、レーニンも1902年に利用者証を得ている。それは、閲覧室が利用者の思想信条にかかわらず開かれていたからであった。

1997年、大英博物館の図書部門はSt. Pancrasの新しい建物に移動し、大英図書館として開設した。『ハリー・ポッター』シリーズでホグワーツ魔法学校行きの列車が出発するKing's Cross駅から歩いて数分のところにある。

1998年から大英博物館の建て替えが始まり、2000年に完成した。閲覧室の周辺には自然光を取り込む天窓がついた、白色が基調のグレート・コートは文字通り大きな中庭となっている。案内所のほか、ミュージアム・ショップとカフェテリアがある。

(14) 「戦艦ポチョムキン」(1925年, ソ連)

原題Bronenosets Potyomkin（英語表記Battleship Potemkin）。ポチョムキン（1739-1791）はロシアの軍人で、ロシアの啓蒙絶対君主エカテリーナ2世（大帝。1729-1796、在位1762-1796）の愛人の1人だった。プガチョフの乱の制定、クリミア併合、ロシア黒海艦隊の創設等を行った。

1905年1月、ペテルブルクで群衆がプラウダ（正義）を求めて、冬宮に向けて行進した。しかし、軍隊がデモ隊に発砲し、数百名が死亡した。これが血の日曜日事件で、第1次ロシア革命の発端となった。同年6月、黒海沿岸の港湾都市オデッサで、ロシア黒海艦隊の戦艦ポチョムキン号で叛乱が起きた。水兵は革命派（メンシェビキ）に指導されていたが、直接のきっかけは腐肉の入ったスープという自然発生的なものだった。1918年11月に始まったドイツ革命も、キール軍港で水兵が起こした叛乱から始まった。

映画の中で、コサック兵が民衆に対して発砲し、人々が逃げ惑う中、乳母

映画で学ぶ第1次世界大戦（関連サイト付）

車が階段を落ちていく場面があるが、映画史に残るものである。余談だが、シカゴ・マフィアのアル・カポネと戦う財務省のチームを描いた「アンタタッチャブル」（1987年，アメリカ）にも，マフィアとアンタタッチャブルたちの銃撃戦の中，階段を乳母車がゆっくりと落ちていく場面が受け継がれた。なお，オデッサは現在ウクライナの国にある。

ロシア革命は1905年，1917年3月（ロシア暦2月），1917年11月（ロシア暦10月）の3度によって完成した。ちなみに，フランス革命は1789年7月14日に始まったが，ナポレオン1世がエルバ島に流されて1814年にルイ18世が即位した。その後，1830年7月の七月革命でブルボン家からオルレアン家に王位が移ったが，1848年2月の二月革命で王制が完全に廃止された。

<関連サイト>

*** International Movie Database “Battleship Potemkin”**

<http://www.imdb.com/title/tt0015648/>

*** 横浜市「オデッサ市」**

<http://www.city.yokohama.jp/me/keiei/kokusai/exchange/sisindex/odessa.html>

1965年に提携して以来，横浜市とオデッサ市は姉妹交流都市である。

*** Official Site of Odessa City (Ukraine)**

<http://www.odessa.ua/?lang=en>

*** Russian Museum Info**

<http://www.russianmuseums.info/>

(15) “Wilson”（1944年，アメリカ）

日本未公開の映画。第2次世界大戦のさなか，1919年のパリ講和会議と人類初の包括的国際組織である国際連盟の設立に尽力したアメリカ大統領を描いた。アカデミー賞10部門にノミネートされ，脚本賞など5部門で受賞した。また，1945年のゴールデン・グローブ賞で，主演俳優が受賞した。主演俳優の容貌は，大統領とよく似ている。

ウィルソン (Thomas Woodrow Wilson, 1856-1924) は、1879年に名門プリンストン大学 (Princeton University。当時はCollege of New Jersey) で学士号を取得した。1886年にジョンズ・ホプキンス大学 (Johns Hopkins University) で政治学の博士号を取得し、その後他の大学で教鞭を執った後、1890年にプリンストン大学の教授に就任した。2年後には理事会の全会一致で同大総長に選出された。1910年、ウィルソンは民主党からニュージャージー州知事選挙に出馬するよう要請され、当選した。1912年の大統領選挙に民主党候補として出馬し、当選した。

1918年1月、ウィルソン大統領は連邦議会の前で行った「14か条の演説」(Fourteen Points) で、国際機構の設立を含む大戦後の世界秩序の基本原則を発表した。そして、1919年4-6月のパリ講和会議を主導し、国際連盟設立に多大な貢献をした。だが、本国では連邦上院がヴェルサイユ条約批准に反対した。ウィルソンは会議の途中で急遽帰国し、遊説を行ったが、無理がたたって病に倒れた。結局、アメリカは国際連盟に加盟しなかった。

ウィルソンは1919年のノーベル平和賞を受賞したが、1924年に亡くなった。しかし、教育者の時代から民主主義を貫くことで知られたウィルソンの理想主義は、今もアメリカ外交の中に脈々と息づいている。また、大学の学科、シンクタンク、財団などにもその名前が冠されている。

<関連サイト>

* The International Movie Database “Wilson (1944)”

<http://www.imdb.com/title/tt0037465/>

* The Woodrow Wilson Presidential Library (USA)

<http://www.woodrowwilson.org/>

* Woodrow Wilson House (USA)

<http://www.woodrowwilsonhouse.org/>

* The White House (USA) “28 Woodrow Wilson 1913-1921”

<http://www.whitehouse.gov/about/presidents/woodrowwilson>

* Woodrow Wilson International Center for Scholars (USA) “Presidential

Memorial Exhibit”

<http://www.wilsoncenter.org/index.cfm?fuseaction=about.exhibit>

* The Official Website of the Nobel Prize (Sweden) “Nobel Prize in Peace 1919 Woodrow Wilson”

http://nobelprize.org/nobel_prizes/peace/laureates/1919/

* Miller Center for Public Affairs, University of Virginia (USA) “American President An Online Reference Resource Woodrow Wilson 1913-1921”

<http://millercenter.org/academic/americanpresident/wilson>

* 東京アメリカンセンター 「14か条の演説」（日本語）

<http://aboutusa.japan.usembassy.gov/j/jusaj-majordocs-fourteenpoints.html>

* The Embassy of the United States in Japan “Fourteen Points”

<http://aboutusa.japan.usembassy.gov/e/jusa-majordocs-fourteenpoints.html>

* PBS (USA) “American Experience Woodrow Wilson”

<http://www.pbs.org/wgbh/amex/wilson/>

* PBS (USA) “Wilson—A Portrait League of Nations”

http://www.pbs.org/wgbh/amex/wilson/portrait/wp_league.html

* BBC (UK) “The League of Nations and the United Nations”

http://www.bbc.co.uk/history/worldwars/wwone/league_nations_01.shtml

* BBC (UK) “Versailles and Peacemaking” by Dr Ruth Henig, Last updated 2009-11-05

http://www.bbc.co.uk/history/worldwars/wwone/versailles_01.shtml

* The United Nations in the Heart of Europe “Library/Archives”

<http://www.unog.ch/library>

* UNESCO “League of Nations Archives 1919-1946”

http://portal.unesco.org/ci/en/ev.php-URL_ID=26995&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html

*Harvard College Library (USA) “League of Nations Documents”

<http://hcl.harvard.edu/research/guides/lon/index.html>

*Northwestern University Library (USA) “League of Nations: Statistical and Disarmament Documents”

<http://digital.library.northwestern.edu/league/>

*Princeton University Library (USA) “The League of Nations: A Primer Document Research”

<http://www.princeton.edu/~sbwhite/un/leagwebb.html>

*University of California at San Diego “The Versailles Treaty June 28, 1919”

<http://history.sandiego.edu/gen/text/versaillestreaty/vercontents.html>

ヴェルサイユ条約全文440条と当時の地図などが掲載されている。政治風刺漫画は必見である。

*国連大学「国際連盟公文書の所蔵について」

<http://www.unu.edu/hq/japanese/library-J/league-of-nations.html>

*PBS (USA) “Versailles Treaty—From the German POV” by Wolfgang Mommsen, University of Dusseldorf

http://www.pbs.org/greatwar/historian/hist_mommsen_02_versailles.html

*AFP (France) 「各地で第1次世界大戦休戦記念式典，独首相が初めてパリの式典に出席」(2009年11月12日 08:38) 発信地パリ/フランス

<http://www.afpbb.com/article/politics/2662629/4884877>

(16) 「ボスニア」(1996年, セルビア)

原題Lepa Sela, Lepo Gore。1990年代前半のボスニア紛争の実話をもとに民族紛争の悲惨さを描く。敵の攻撃で、トンネルに立てこもったセルビア兵。だが、彼の前に現れた敵兵は、幼なじみのムスリム(イスラム教徒)だった。
<関連サイト>

*The Department of State (USA) “The Summary of Dayton Peace Agreement” (Fact sheet released by the Bureau of Public Affairs, December 11, 1995)

<http://www.state.gov/www/regions/eur/bosnia/dayton.html>

ボスニア紛争は、アメリカの仲介によって、1995年のデートン合意でようやく和平を実現した。

*Lillian Goldman Law Library, Yale Law School (USA) “The Avalon Project—Dayton Peace Accords”

http://avalon.law.yale.edu/subject_menus/daymenu.asp

*Human Rights Library, University of Minnesota (USA) “The Dayton Peace Accords on Bosnia”

<http://www1.umn.edu/humanrts/icty/dayton/daytonaccord.html>

*OSCE Mission to Bosnia and Herzegovina

<http://www.oscebih.org/>

OSCE(<http://www.osce.org/>)は欧州安全保障機構(The Organization for Security and Co-operation in Europe)の略。

*Office of the High Representative and EU Special Representative

<http://www.ohr.int/>

(17) 「セイヴィア」(1998年, アメリカ)

原題Savior (救済者, 救う人, 救国者)。1990年代前半のボスニア紛争を題材に、戦争の悲惨さと人間の絆を描く。大文字のThe Savio(u)rで「救世主, キリスト」の意。

<関連サイト>

*外務省「各国・地域情勢 欧州 ボスニア」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/>

*在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本国大使館

http://www.bosnia.emb-japan.go.jp/index_j.html

*EU “European Union in Bosnia and Herzegovina”

<http://www.eubih.org/>

(18) 「エネミー・ライン」(2001年, アメリカ)

原題Behind Enemy Lines。ボスニアの非武装地帯であるはずの地域に、セルビア人武装勢力が潜んでいた。これを発見し、撮影したアメリカ軍偵察飛行機は、武装勢力に撃墜される。パイロットが逃げる途中、ムスリムの大量の死体に遭遇する。映画は2001年11月に公開され、5900万ドルを稼ぎ出した。

1995年6月、アメリカ空軍のスコット・オグレイディー (Scott O' Gradey) 大尉 (当時) の乗ったF-16戦闘機がセルビア人武装勢力のミサイルで撃墜された。パイロットは6日の間逃避行を続け、アメリカ海兵隊に救出された。2002年8月、オグレイディー氏は、映画は自分の体験を基にしているが自分の許可なく制作したとして、映画と自分の救出に関するドキュメンタリー・フィルムを制作した20世紀フォックス社を訴えた。たしかに、映画の主演オーウェン・ウィルソン (Owen C. Wilson, 1968-) は、本人と容姿も雰囲気もよく似ている。

<関連サイト>

*New York Times (USA) “US Jet Pilot Lost in Bosnia is Found Alive”

<http://www.nytimes.com/1995/06/08/world/us-jet-pilot-lost-in-bosnia-is-found-alive.html>

*BBC (UK) “Pilot sues over Bosnian escape movie” (Tuesday, 20 August, 2002, 16:00 GMT 17:00 UK)

<http://news.bbc.co.uk/2/hi/entertainment/2205560.stm>

(19) 「ライフ・イズ・ミラクル」(2004年, フランス, セルビア・モンテネグロ)

原題Zivot je Cudo。1992年に旧ユーゴスラビアのボスニアで内戦が始まると、片田舎で平和に暮らしていた鉄道技師ルカの生活は一変した。最愛の息

子は軍隊にとられ、妻は男と駆落ちする。捕虜になった息子を取り戻そうと、父はイスラムの女性を人質にした。2人の間に愛が芽生えていくが、捕虜交換の日が近づいてきた。

ユーゴスラビア社会主義共和国連邦（旧ユーゴスラビア）から、1991年にボスニア・ヘルツェゴビナなどが独立を宣言した。1992年、残されたセルビアとモンテネグロはユーゴスラビア連邦共和国（新ユーゴスラビア）を宣言した。2003年、国名をセルビア・モンテネグロに変更した。2006年6月、モンテネグロはモンテネグロ共和国として独立を宣言し、2007年10月に新憲法を制定して、国名をモンテネグロに変更した。

<関連サイト>

***BBC (UK) “Timeline: Break-up of Yugoslavia”**

<http://news.bbc.co.uk/2/hi/europe/4997380.stm>

***外務省「各国・地域情勢 欧州 モンテネグロ」**

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/montenegro/>

***在セルビア日本国大使館**

<http://www.yu.emb-japan.go.jp/>

在モンテネグロ日本国大使館・総領事館は、在セルビア日本国大使館が兼管する。

***在日セルビア共和国大使館**

<http://www.serbianembassy.jp/>

(20) 「カルラのリスト」(2006年、スイス)

原題Carla's List。2006年ロカルノ国際映画祭公式招待作品。旧ユーゴスラビア紛争の残虐行為を裁くために、1993年5月25日、国連安保理決議827(1993)が採択された。同決議に基づき、旧ユーゴスラヴィア国際刑事裁判所(ICTY)がオランダのハーグに設置された。

ICTYの検事として、ボスニア紛争で起きた数々の虐殺の責任者を追いつけるカルラ・デル・ポンテ。スイスのイタリア語圏の出身で、マフィアに関する

る捜査でも活躍した。彼女の身の安全のため、居所は明らかにされない。

カメラは、ヨーロッパ中を飛び回るカルラの日常をリアルタイムで追いかける。レイプされた女性たちの証言は生々しく、戦争の爪痕の深さを思い知らされる。夫や子ども、兄弟を連れさられ、虐殺されたが、遺体の埋葬箇所さえわからない人も多い。

2008年7月、ボスニア紛争時、セルビア人勢力の指導者だったカラジッチが逮捕された。現在は、「国際刑事裁判所に関するローマ規程」(1998年採択)に基づき設立された、常設裁判所である国際刑事裁判所 (ICC) がこの種の事件を扱う。ICCもハーグに設置されている。なお、アメリカはローマ規程を批准していない。

<関連サイト>

*映画公式サイト

<http://www.uplink.co.jp/carla/index.php>

*International Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia (ICTY)

<http://www.icty.org/>

*Audiovisual Library of International Law, Statute of the International Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia, Security Council resolution 827 (1993), 25 May 1993

<http://untreaty.un.org/cod/avl/ha/icty/icty.html>

*Arthur W. Diamond Law Library, Columbia Law School (US) “Research Guide: Intl. Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia”

http://www.law.columbia.edu/library/Research_Guides/internat_law/icty

*International Criminal Court (ICC)

<http://www.icc-cpi.int/>

*International Court of Justice (ICJ) “Application of the Convention on the Prevention and Punishment of the Crime of Genocide (Croatia v. Serbia)” (1999)

<http://www.icj-ij.org/docket/index.php?p1=3&2=3&code=cry&case=118>

&k=73

クロアチアがセルビアを、集団殺害を禁じたジェノサイド条約違反でICJに訴えた事件。審理継続中。

*外務省「国際刑事裁判所（ICC）」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/icc/index.html>

*外務省「国際刑事裁判所に関するローマ規程について（略称：国際刑事裁判所ローマ規程）」

http://www.mofa.go.jp/mofaj/treaty/treaty166_1_gai.html

*外務省「国際刑事裁判所（ICC）に関するローマ規程」の加入書の寄託について（平成19年7月18日）

http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/h19/7/1174498_808.html